

ASAGOiNG ゼミ U-18 現代文

竹田城跡で有名な和田山町竹田と、この竹田に2013年にオープンした複合施設『旧木村酒造場EN(えん)』。以下の文章は、ENが町に根差していくまでと、その中心を担った中原大輔さんの物語を綴ったショートストーリーです。これらを読んで、続く問いに答えてください。

第一章

「よいさー、よいさー、よいさっさー!」

風に乗って聴こえてきた子供たちの掛け声は、中原の鼓膜と心をかすめ、空に散る。やがてそれは次第に近づき、『EN』の門をくぐり、中庭にこだまする。掛け声と青いハッピに身を包んだ子供たちが担ぎ込んだ。屋台が、目の前でぐるぐるど弧を描く。これまでのことが、白みがかった映像とともに中原の脳裏にぼんやりと浮かんでは消えた。

涙はない。それでも「あたたかな熱」は確かに中原を包む。それは、「ヨソモノ」だった中原と『EN』がこの町に受け入れられた瞬間だったのかもしれない。

中原大輔は、岐阜で生まれ育った。小2から始めたサッカーの実力はチームで頭一つ抜けており、高校時代は県選抜メンバーにも選ばれたスタープレイヤー。キャプテンなども歴任し、練習メニューも自ら作ってメンバーに指示していたほどで、そのヒーローぶりはもはや漫画の主人公並みとよかつたろう。

しかし、栄光は時として人を狂わせる。面倒見よくリーダーシップを発揮していた中原も、いつしか自分中心に回る世界の住人となっており、その肥大した万能感は一線を超えた。人の意見や気持ちに耳を傾けることを忘れ、技術で劣るチームメイトに「なんでそんなこともできないんだ!」と暴言を吐くようになっていたのだ。砂時計のようにゆっくりと、しかし確実に流れ落ちていく仲間からの信頼に気づかない中原に、見かねた顧問は厳しい罰を与えた。「……おまえ、もう試合に出るな」。試合だけではない。練習への参加も禁じられた。かつての主人公は、膝を抱えて仲間たちの練習を眺めるのみの日々。

唯一にして最も自分が輝ける場所を奪われ、虚無に等しい何か自分が自分を包むのを感じながら、中原はこれまでの振る舞いを省みた。キャプテンとして求められていることは何だったのか。

猛省の先に、先頭に立って強引に引っ張るだけの高圧的なリーダーはもういなくなっていた。生まれ変わり、相手と同じ目線に立つことを覚えた。そしてその姿勢は、歓迎をもって仲間を受け入れられた。結果としてこの経験は、中原の人生を大きく揺り動かす核となるのだが、それはまだもう少し先の話だ。

大学卒業後は、誰もがその名を知る大手IT企業に入社。それを②「勝ち組」と称する人は多かったし、仕事もソツなくこなす日々。悪くない人生だ。しかし、中原にとってそれは「勝利」ではなかった。なにかが、どこかが満たされない。③心の中には常に葛藤が美食い、内側から「ここを開ける!」と騒ぎ立てる。「ITの仕事は楽しいのか?」「このままの暮らしを続けていくのか?」「オマエがほんとにやりたいことは何だ!」。やがて三十路を迎えるころ、彼らは心のドアを内から蹴破り、歓声とともに我先にと駆け出してきた。自由という海原へ。

その声たちは、天使の微笑みだったのか、悪魔のささやきだったのかは分からない。しかし、そんなことはどうでもよかった。一つ分かっていたのは、いまずぐペンを取れということだ。退職願を書くために――

住みなれた都会を離れた中原。兵庫県篠山市で友人たちと観光関連のビジネスを立ち上げる。古民家再生やツアー企画のプロデューサーとしてスタートの号砲を鳴らしたのだ。都会から田舎に移ったり、ITとは全く関係のない仕事を選んだりしたのは、何かで自分の価値観を変えてくれるんじゃないかと考えたからだ。「何かとは何か」なんて知らない。ビジネスが成功する根拠などない。そう感じたから、そうしたかったからそうしたまでだ。ブレーキのないトロツコに飛び乗り、重力と慣性に任せて走り出せば、あとはどうにかなる。若いとはそういうものだし、それが最大の武器だ。勢いと不安定さが同居する旅の始まりだった。

問1 ①それとは何を指していますか。(読解問題)

問2 ②「勝ち組」は、例えば大企業に入るなど、社会の競争に勝って安定した生活や高収入を得ることに成功した人たちを指す言葉です。ただ、一般的にはそうかもしれないが、それだけが人生の「勝利」ではないはず。それをふまえて考えてください。

(1) 中原さんにとって「勝利」とは何だったのでしょうか。(読解問題)

(2) あなたにとって人生の「勝利」とは何ですか。自由に考えてみてください。

(自分の意見)

問3

③ 心の中には「自由という海原へ」の部分を読んで答えください。

(1) このように、本来は人間でないものを人間に例えて表現することを「擬人法」といいます。ここで、人間に例えられているのは何ですか。(読解問題)

(2) 自由という海原とは、言い換えれば中原さんの何を指していますか。(読解問題)

(3) 擬人法を使って30文字以下で例文を作ってみましょう。(テーマ作文)

--	--

(4) 三十路(みそじ)とは、30歳の別名のことです。このように日本では、年齢を別の言い方で表現することがあります。では、次の年齢はそれぞれ、なぜそのような言い方(意味)をするのだと思いますか。漢字をヒントに考えてみましょう。(知識問題)

④	③	②	①
白寿 (はくじゅ・99歳)	米寿 (べいじゅ・88歳)	古希 (こき・70歳)	還暦 (かんれき・60歳)

問4

顧問の先生は、中原さんに厳しい罰を与えることで何を教えたかったのでしょうか。反省した中原さんの想いをふまえて考えてみましょう。(読解問題)

第二章

竹田城跡。今でこそ“天空の城”“日本のマチュピチュ”として日本中、いや世界中から観光客が押し寄せるようになってきているが、世間に知られるようになったのはここ10年ほどの間だ。2006年に『日本100名城』に選ばれたことをきっかけに、一部の歴史ファンから火がついた。翌年には、雲海に浮かぶ城跡の写真が注目を集め、その知名度は一躍全国区に。それまで2〜3万人程度だった竹田への観光客は一気に^④右肩上がりとなり、ここ数年で最大20倍以上にまで跳ね上がったほどだ。

だが、最新鋭のロケットに乗せられたかのごとく、人気観光地という宇宙まで一気に打ち上げられたまでは良かったが、そのG(重力加速度)に人間が耐えられるかどうかは別だ。海外のオーディション番組で普通の中年女性がその歌唱力を見出され、一夜にして人気歌手へのスターダムを駆け上がる^⑤シンデレラストーリーがあったが、それに近いかもしれない。それまで、良くも悪くも色あせ気味にかすんだ静かな観光地にすぎなかった竹田が、一気に屈指の人気スポットに成長を遂げていくそのスピードに、地元の人たちが戸惑いを隠せないのも無理はないだろう。「外から人を迎え入れる」ということにも慣れていなかった。もちろん、自分たちの町を気に入って、たくさんの人が訪れてくれるのは嬉しいこと。観光客に楽しく過ごしてもらおう、良い思い出を作ってもらおうと、町の人たちもさまざまな取り組みを始めていたが、それ以上にロケットは速かったのだ。

そんな折、^⑥かつての城下町にあった酒造場をリノベート(改築)して再び命を吹き込み、2013年に産声を上げたのが、複合施設の『EN(えん)』だ。ホテル、地産地消のフレンチレストラン、コミュニティカフェ、地元の工芸品や雑貨、農産物、名物のどぶろくなどを扱うショップと、交流スペースなどで構成されている。マルシェや味噌づくりのワークショップなど、イベントも多彩だ。

地域のランドマークとして、観光客と地域の人をつなぐ場として、また地域の人同士の交流の場として。人と人の「縁」(EN)を結ぶ場になって欲しい——そんな願いを込めて作られた。その運営を引き継ぐことになったのが、あの中原だった。2015年の冬のことだ。

問5 ^④右肩上がりとは、グラフの線が右に向かって上がっていくことに例え、後になるほど

ど数が増えたり状態が良くなったりする意味の言葉です。この「右肩上がり」とやや似た意味の言葉で、みるみるうちに数値などが上昇することを、ある魚に例えてなんというでしょうか？また、その語源(由来)は何でしょうか。(知識問題)

言葉	語源

問6 ⑤シンデレラストーリーは、童話『シンデレラ』の主人公のように、一般の人や団体が、何かをきっかけにこれまでとは見違えるほどの幸福を手にする成功物語のことです。こうしたシンデレラストーリーが題材になっている文学作品は多数あります。知っているものを挙げてみましょう(シンデレラ以外)。(知識問題)

問7 ⑥かつての城下町に『E・N(えん)』だ。とあるように、使われなくなった古い建物などを再利用して、観光などに活用しようという動きが全国的にみられています。もしあなたが、自分の町にある「古いもの・使われなくなったもの」を再利用して何かに活かすとしたら、どんなことができると思いますか。自由に発想してみてください。(自分の意見)

第三章

中原は困っていた。いや、途方に暮れていたといつてよかろう。観光イベントの事業は、共に立ち上げた仲間の都合もあってわずか一年半で解散していた。どうにかなると思って走り出したブレーキなしのトロツコは、ものの見事に脱線し、大破していたのだ。農家の友人たちが作るオーガニック野菜の美味しさに感動し、これらを使った小さなカフェレストランも運営し始めたが、経営的にはうまくいかず最後には手放した。それでも、どうにか一人で地域や観光に携わる仕事を細々と続けていたが、なんとか糊口をしのぎつつの、さながら⑧自転車操業。光の見えない漆黒の海に、イカダで漂っている気分だ。

意気込んで独立したあの頃の自分はどこへ行ったのか。お金もない。仲間も去った。住んでいた家も引き払った。「寂しいな。それに、しんどいな……」。そんな痛みを抱えたまま、イカダがたどり着いたのが、竹田だった。「E・Nの運営業務をやってみないか？」という話が来たからだ。

やけくそだったのか、溺れかけて掴んだ藁(わら)だったのかは分からない。傷つき、疲れた心をずるずると引きずりながらやって来た中原だったが、そんな彼を温かく迎えてくれたのが、竹田に暮らす若者たちだった。^⑧自分の家に居候させてくれたり、家にご飯に招いてくれたり、ENで開くイベントを手弁当で手伝ってくれたり。「なんか困ったことあったら、なんでも言うてきて!」。その言葉こそ、疲れ切った中原が心から求めていたもの。「人と人とのつながり」「人のやさしさ」が、そこにあった。

「この人たちのためなら、頑張れる!」、そう素直に感じた。「地域活性を行うぞ!」なんて仰々しい正義感の旗を掲げたわけではない。「町そのもの」のために頑張るといふより、「この人たちが暮らす町」のために。そんな気持ちになった。

だが運営を引き継いだ当時のENには、課題も山積していた。もともと、地域の人たちがここにどう関わり、どう活かすかがテーマだったが、竹田の急激な観光地化に多くの人戸惑っていたことも影響していたのかもしれない。ENも、地域の人々も、熱い思いはあるもの、お互いどう協力体制を作ればいいのか分からずにいた。

ENが何をしようとしているのかが見えない。地域の人々が何を求めているのか分からない。いつの間にか、敷かれたレールのごとく交わることない平行線をたどる日々、目指した地域の縁(EN)は紡がれず、ただ観光客ばかりが訪れる。中には「ホテルやレストランで商売をしたいだけではないのか」と不信感さえ抱く人もいたが、それも無理のない話だ。そんなときに、中原は着任したのだ。

問⑧ 「^⑦糊口をしのぎ」の「糊」とはおかゆのことです。これをヒントに、「糊口をしのぐ」とはどういう意味の言葉か、前後の文章との繋がりなども参考に答えてください。

い。(知識問題・読解問題)

問⑨ ^⑩自転車操業とは、経営難に陥った会社などが、事業運転資金の借入れと返済とを

ギリギリで繰り返しながら、赤字覚悟で操業を継続していく状態のことを指します。借り入れをしてまで操業しても、その返済を考えるとほとんど利益がない(もしくは赤字になる)、かといって借り入れをしないと、操業できなくなり今すぐ倒産してしまう、だから仕方なく借り入れをし……という状態です。ではなぜ、これを「自転車操業」と呼ぶのでしょうか。(知識問題)

問10

⑨ 自分の家に手伝ってくれたり。にあるように、田舎(地方)は都会に比べ、近隣住民との人間関係や人付き合いが濃い傾向があります。これには、本文のように「助け合える」というメリットがありますが、同時にデメリットも存在します。こうした田舎特有の人付き合いの濃さには、ほかにどのようなメリット・デメリットがあると思いますか。自由に答えてください。(自分の意見)

メリット	デメリット

問11

中原さんがENの管理運営職に就くにあたり、なぜ、中原さんは竹田の(ENの)ために頑張ろうと思えたのでしょうか。(読解問題)

第四章

そんな不信感のある状況だ。ENも中原も、地域の人たちにとってはある意味で信用ならない。ヨソモノでしかない。強引に進めることもできただろうが、それでは溝が深まるばかりだ。「どないせえつちゆうんや……」。八方塞がりと思えたが、ふとまぶたの裏に浮かんだ光景がある。⑩練習場の片隅で、仲間たちを寂しく眺めるだけのサッカー少年の姿だ。あのとき、サッカー少年はどうした? どうやってチームメイトの信頼を取り戻していった? まず、なすべきことは一つだ。

しかも、中原が抱く竹田の「人」に対する想いは、もはや家族に対するそれに等しい。人々のもとへ何度も足を運び、その声に真摯に耳を傾け、絡まった糸を一本一本ほどいてゆく。もちろん中原は、決して自分の意見を押し付けない。相手を否定しない。ただただ、聴き、深くうなづく。「分かってください!」とも言わない。サッカー少年が「なぜそんなこともできないんだ!」と口にしなくなったように。

そうして中原とENは、種が地中深くに根を張るように、広く水を吸い取るように、根気よく地域に溶け込んでいった。やがてその種は、地上へ芽吹き始めた。どちらかという、ENに批判的だった人も、次第に理解を示すようになる。ある人はこう言った。「俺さ、あんた自身のことは嫌いじゃないんだよ」。

ボタンの掛け違えというのだろうか。もともと、互いの考えを交わす機会があまりなく、目指すものを共有できていなかっただけで、方向性や想い、その熱量も同じだった両者だ。違う方向を向いていたわけではない。一度交わってしまえば、その流れは大河となる。その二つの川をつなぐ堰をこじ開けたのが、中原だったのだ。

地元主婦が集まって音楽イベントを開いた。早朝、竹田城の雲海を見に行く観光客たちに、朝食を出そうというアイデアが出た。パン屋さんを集めてイベントを開いた。寄席も開催された。⑩せき止められていた水は、轟音をひびかせ、一気に流れ始めた。

そして、秋――

「よいさー、よいさー、よいさっさー!」

風に乗って聴こえてきた子供たちの掛け声は、中原の鼓膜と心をかすめ、空に散る。やがてそれは次第に近づき、『EN』の門をくぐり、中庭にこだまする。掛け声と青いハッピに身を包んだ子供たちが担ぎ込んだ「屋台」が、目の前でぐるぐると弧を描く。

きっかけは、地域の会議で仲良くなったとらふす会の代表がかけてくれたひと声だ。

「今年の秋祭り、屋台、入ろうか?」。もちろん答えなんて、一つしかない。地域の伝統である屋台が入るということは、その一員として認められたと同じだと感じたからだ。「はい、ぜひ!」。

「よいさー、よいさー、よいさっさー!」

屋台は、なおも勢いよく回り、ENを駆け抜ける。「縁……か」。中原は一つ、そして深く息を吸い、声にならないつぶやきとともに吐き出す。笑っていた。よく晴れた秋の空を見上げた。赤トンボがスイと飛んでいった。

問12 「^⑩練習場の片隅で「なすべき」とは「つだ」を読んで答えてください。

(1) このサッカー少年とは誰のことですか。(読解問題)

(2) 「なすべき」とは「つ」とありますが、具体的にそれは何でしょうか。(読解問題)

問
14

地域の人たちは、なぜ中原さんを信用するようになったのだと思いますか。
（読解問題）

問
15

人が分かり合い、協力できるようになるためには、何が大切だと思いますか？中原さんの想いや行動とは関係なく、あなた自身の考えを理由とともに述べてください。
（自分の意見）